



みずみどり

2005年7月15日

第49号

発行：いたばし水と緑の会 事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会

<http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/>E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124



植物は 左利きが多い

七月になると促成された朝顔が鉢植えで売られる朝顔市があり、朝顔は苗を求めたり種からの園芸を楽しまれる、育てやすい夏の代表的な草花だ。小学校の夏休みに観察日記を書いたことのある人も多いのではないだろうか。

アサガオは典型的なつる植物だが、生存競争に勝ち残るため、どうにかして周りの植物より多くの光を受けようとしたとき、幹を極端にスリム化して、伸ばすことに勢力集中して進化したのが蔓性植物だ。幹や枝を伸ばさずに、落葉樹の下で春早に子孫を残してしまうものや、他の植物が生えない環境に住み分けるなど、植物は色々な知恵を働かせている。

蔓植物は自立できないほど細いので、周りの物体につかまって昇ったり、明るいところまで這い出たりするが、その方法には何種類もあり、次のように分類（独断）できる。幹や葉柄にある下向きの棘を引っ掛けてよじ登る、アカネやヤエムグラなどのような鉤型、ブドウや瓜類のようにヒゲ蔓（葉っぱの変形）を伸ばし、触れるものに巻きつけて自分を引き寄せて支える、巻きひげ型（葉柄を絡ませるテッセンやヒヨドリジョウゴなどは前段階か）、幹や茎から根（気根）や吸盤を出して付着するツタのような付着型、地上を這って伸び、ときに垂れ下がったりする這回型、そして、アサガ

オのような巻きつき型などとなる。これらのいくつかを併せ持つ複合型があり、カナムグラなどは巻き付くだけでなく、這い上がれるように茎や葉柄に強固な棘がある。また、節から根を出し繁殖する蔓性植物は多く、園芸では一節挿しでよく増やせる。

他の物体に巻き付き立ち上がる巻きつき型は、成長点を伸ばしながら首振り（回旋運動）をして、触れたものに巻き付くことが知られている。巻き付く方向は植物ごとに決まっているが、フジ以外は図鑑などにもあまり書かれていない。よく「朝顔は左巻き」と言われるが、その他のものはどうなっているか気になり、夏の小学生に戻ったつもりで手近な巻きつき型植物の巻き方向を調べてみた。結果は表のとおり左巻きが圧倒的で、右巻きはスイカズラ、ノダフジ（園芸用）、ヘクソカズラなど少数だった。絡むのは人間にも左党が多いようだが、地球の原始から受け継いでいる共通のDNAの仕業か知らん。

あるいは台風の渦巻きが南北の半球で違うように、南半球ではアサガオの蔓も右に巻くのだろうか。また、疑問ができてしまい、夏の夜の蒸し暑さを助長することになりそうだ。

巻きつき型植物の巻方向

左巻き植物		右巻き植物
アケビ（3葉、5葉、ムベ）	ツルムラサキ	カナムグラ
アサガオ	ツンベルギア	サネカズラ（ビナンカズラ）
アリアケカズラ 1	テイカカズラ	スイカズラ
アリマウマノスズクサ	トキリマメ 1	トコロ
インゲン	ノアズキ 1	ツルニンジン 1
ガガイモ	ノササゲ 1	ネナシカズラ 1
カモメズル（コバ、シロバナ） 1	ヒルガオ、コヒルガオ	フジ（ノダフジ）
キウイ	ヤブツルアズキ 1	ヘクソカズラ
クズ	ヤマイモ	
サルナシ	ヤマフジ（ノフジ） 2	
ジャスミン（マダカスカル、ハゴロモ他）	ヤママメ 1	
ツルウメモドキ	ルコウソウ	
ツルマメ 1	大豆 3	

1：図鑑の写真から判定したもの

2：文献には山藤は左巻きと書いてあるが、北野神社の柱に自生するフジは高い樹上に絡んでいるが、右巻きなので園芸種なのかも知れない。

3：大豆を日照不足で育てたところ、蔓になって絡んだことがあった。

なお、右巻き左巻きの定義は、上から見て反時計方向に巻き付くもの（右ネジに相当）を左巻きと呼んでいる。一部のものは図鑑の写真から判定したが、実物を見たものでサンプルは少なく、中には左右どちらにも絡まる植物があるかもしれない。つる草ではないが、モジズリ（ネジバナ）の螺旋花は右・左どちらに捩れるものや、真っ直ぐで捩れないのもあるので、つる植物にもそのようなものだったり、調査もれの種類などお教えいただきたい。

アメリカザリガニの疑問と勘違い・ 生き物とのふれあいとは

4月からひたすら湧水池のザリガニ捕りを続けてきました。ザリガニさえいなければ、もっといいビオトープ池になるはずだからです。この作業で納得したこと・勘違いだったこと・まちなかの自然とは等、私を感じたことをちょっと聞いて下さい。

その1 アメリカザリガニは、2ヶ月で増殖するか

小さな湧水池で何匹かのザリガニを見つけたのが2002年6月でした。その年の8月ははっきり「増えた」という感じ。9月には水草の茎もなくなってしまい呆然としました。捕獲したザリガニ数はその年で54匹、翌年（2003年）で47匹、捕獲数は氷山の一角、とって減るどころか増える一方という感じでした。しかし2ヶ月で産卵し次の世代が大きくなるほど成長が早いわけではなく、そう見えただけらしい。

佐藤修さんの報告や本をよく読むと、交尾から産卵まで40～90日、産卵から孵化まで2週間、孵化して8mmの稚エビになるのにさらに2週間、ここから先は急に大きくなる。孵化から1年半から2年後で繁殖可能とあります。インターネットのザリガニ飼育日記では孵化後13ヶ月で抱卵していたとある。いずれにせよ前年かそれ以前に放されたザリガニが増えてから気がついた、なのでしょう。今年は4月始めに冬眠中のザリガニを103匹、7月6日まで全部で307匹捕獲（最小は6月1日体長2cmが2匹、この春孵化した個体でないと思われるが）、最初に入れたのは何匹か、今も人による補給があるのか、わかりません。

その2 アメリカザリガニは、やわらかい水草を食べ尽くすか

これは本当です。水研クリエイトの佐藤さんの報告（みずみどり20号、ホームページにも掲載）でも写真入りで食害が紹介されています。大食なのですね。湧水池にザリガニが投げ込まれて消えたのがエビモ（藻）、クレソン、セリ、スイレン。藻は



すぐに、クレソンとセリは茎や葉脈を残して食べられ、次に行ったときは茎もなくなってしまいました。ところがキショウブ、ショウブは残っています。美味しくないのか、固いのか。トンボ池でもガマはなくなりましたがイグサ（畳表にする固い草）は生き残っています。固い草しか育たない水辺もさみしいものですよ。赤塚植物園ではザリガニもいるようですが、管理が行き届いていて水草も繁茂しています。が、この小さい池ではザリガニとの共存は非常にむずかしい。写真左は2001年6月で藻があります。右は2002年9月で、ショウブ以外はすっかり消えてしまいました。

その3 アメリカザリガニは共食いするか

狭いバケツの過密状態で、大きなザリガニがハサミを振り上げ、ようやく4cm位の仲間1匹を捕まえました。捕まえた仲間のハサミを切り、脚を全部しごいて千切ってしまいました。この間30分位か。逃げるのは早いですが、襲い方は敏捷ではありません。しかし手足をもがれ半死のザリガニと格闘したものの食べることが出来ず、ヘトヘトになって、あきらめて放してしまいました。ザリガニは甲殻類、殻が固く小さなザリガニでも食べられないようです（脱皮時には共食いする）。

その4 オタマジャクシがいなくなったのはザリガニが食べたからか

前号にも書きましたが、今年はいじめて多数のオタマジャクシが生き残り、無事カエルになりました。私達はザリガニがオタマジャクシをおそっているところを何度か見えています。しかし赤塚トンボ池ではオタマジャクシの大敵は人間ではないかと思われました。今年は池が干上がって泥深く、全部は捕まえられなかったのです。子供達は「学校の観察の時間に必要だから」、「家で飼いたい」等々と言って網をもって柵を乗り越えて池に入ります。生き物を捕まえるのは楽しい。触る体験から生き物や命を学ぶとも言われます。しかしこの池は、何人かが生き物を持ち出せばいなくなってしまう位小さい。都会こそ子供達の遊びを許容できる広い自然の環境が必要です。でも小さな池しかなかったらどうしたらよいのか、子供達と大人と一緒に考えたいテーマです。

その5 トンボのヤゴがいなのは、ザリガニに食べられたからか

小さな池が出来た年にクロスジギンヤンマの抜け殻は80頭もあったのに、ザリガニが投げ込まれてからヤゴも抜け殻も見あたりません。トンボが来て産卵するのを見るたび、ヤゴが育ち、トンボが羽化する池を取り戻したいと思うのです。

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」が6月から施行されました。特定外来生物に指定された生物のひとつ、話題のブラックバス(オオクチバス)も、生態系に与える影響の大きさと対策の必要性がはじめて認められたのです。

アメリカザリガニは大正時代にウシガエルのエサとして日本に持ち込まれ、既に野生化しています。外来生物ですが、法の対象外です。農薬に弱いので水田では問題になってないようです。しかし私達の自然を取り戻す活動でわかったことは、農薬を使わない自然の池(ビオトープ)では、アメリカザリガニが在来の動植物に想像以上に大きな影響を及ぼしていることです。そして、いったん放されてしまうとその除去は非常に困難です。カメ、ザリガニに限らず飼育していた生き物を「自然に帰してあげ」つもりで近くの公園などに放すことは、自然破壊にもなるのです。

と言うと「ザリガニは有害だから捕ったほうがいいでしょ」(ザリガニが悪いわけではない)と、柵を越え池の中へ立ち入られるのも困ります。保護している水際やそこにいる小さな生き物がダメージを受けます。

ザリガニや蛙だけが生き物ではない。様々な小さな生き物たちがいっしょうけんめい生き残る工夫をしていることを子供達に教えてあげたい。赤塚公園にはそういう自然が残っており、この世界は人間だけのものではないことを教えてくれる場所です。そして同じ公園内にある大きな赤塚ため池の一部でも、子供達が小さな生き物とふれあえるビオトープにできないのかなあと思うのです(坂本 郁子)。

赤塚トンボ池の観察ノートから

17.6.28 池にオオシオカラトンボ 縄張り争い(池の中の20cmの杭の上)

他の2匹がくると追い払って杭にもどる。妻が卵を産んでいるトンボがいたら、深青色のと違って黄色っぽく尾の先が黒い が池の中から15~20cm位の岸辺にチョンチョンと尾を振るように池半周位に次々と少しずつ移動しながら生み続ける。オスがすぐ上を警護したり、近くを飛んだり、他のオスを追っ払ったりしている。そのうちオスとメスが合体して低い杭の上で1~2分休んでまた生み続ける。トンボ王国のとおりだ。

(ポストの中の観察ノートに誰でも気がついたことを書いてもらっています。その一部を紹介しました)

ワタゲハナグルマについて

何年か前から気づいていた徳丸6丁目の高山公園に咲く黄色い花は、遠目にはタンポポそっくりに見え、そのまま見過ごしていたが、今年は大分群落が大きくなり(写真1)何か違うように思えて目近に眺めると、似て否なることが分かった。花弁は少し厚くてまばらな一重で、少し下に反り返っており、セイヨウタンポポとは大分違う。総包はカントウタンポポなどに似てそり返えない。花茎はやや白く、縦に皺があり1ミリ以下の短い棘がある。葉はタンポポに似た形だが厚くて裏が白いピロウド状である。一株試料を採取したところ、ジシバリ(ニガナ属)のような地際を這う茎で繋がっており、一節ごとに根を出し株に生長している(写真2)。花後の種には綿毛はなく、結実した種は少ないようで、繁殖は種よりもランナーによる方が多いと思われる。いずれにしてもタンポポのように遠くまで種を飛ばす特技はない。

手持ちの図鑑には、この草が載っておらず、赤塚植物園にサンプルを持ち相談に行ったところ、近藤さんもこの草に気づかれており、記載した図鑑も探されてあった。

名前は表記のとおりで、綿毛花車とも書く南アフリカ原産のアルクトテカ(*Arctotheca*)属・キク科の多年生植物だった。

日本に入って来たのが比較的遅くて、古い図書には載っていない。インターネットで検索しても10件程度と少なく、説明記事も簡単なものが多い。花期は3月から10月とセイヨウタンポポ程ではないがかなり長い。

1992年発行の神奈川県植物誌調査会会報に、宅地造成地などで採取したとの記事が古いようだ。HPでは2002年以降に撮影された写真しか出ていない。畦や土手などのグランドカバーに利用されているらしいので、渡来したのはそれよりは前であろう。高山公園での群生状態からも、グランドカバーとして使うには適材のようだ。

名前にワタゲツルハナグルマと「ツル」の文字が入った資料も見受けられるが、植生からうなずける。なお、植物園に持参したサンプルは、鉢植えにされ事務所前に提示してあるので、来訪者は見る事が出来る(猪鼻 昭二)。



北本自然観察公園見学報告



板橋区みどりと公園課と日本生態系協会共催の環境シニアスクールに受講料 5000 円を払い、全 8 回のコースに参加しました。6 月 9 日は埼玉県北本市にある北本自然観察公園の見学に行ってきたので、その報告をします。

ここは高崎線で赤羽から約 30 分、さらにバスで 20 分ぐらいの所にあります。

北本自然観察公園のある場所は、今から 20 年程前にこの地域を住宅地にするか、自然を残すか、で大きな議論があったそうです。今では隣の北里病院に次ぐ、たくさんの人が訪れる場所として市の観光課でも自慢の場所だそうです。

この自然公園はサシバを呼び戻すことを目標にしています。開発が進む前、ここはサシバや狐が子育てをする場所だったのですが、サシバは 50 ha 以上ないと子育て出来ないで今では姿を消しています。そこで北本自然観察公園と荒川の広大なビオトープをつないでサシバが子育て出来る状況になったそうです。狐はすでに繁殖を始め、観察用のカメラにはベニマシコ、ノスリ、カワセミも確認されています。サシバはまだのようですが。

公園の中は、ヨシが生い茂る湿地とそれを取り巻く森から出来ています。ヨシが生い茂る湿地ではオオヨシキリがオス同士の縄張り争いソングポストを飛び回ってギョギョシギョギョシと大きな声で鳴き大騒ぎ、自分の遺伝子を残すために必死のようで、小鳥が楽しげにさえずっていると思うのは人間の勝手な解釈のようです。

湿地中は、ウシガエルが低い声で鳴き、林の中ではオオミズアオが羽化の途中でした。木の深い穴にはニホンミツバチが巣を作っていました。

公園の森は多様性を保つために、管理も変えています。何も手を入れていない場所、木を切って光が入り下草が育つようにした場所、下草を刈って落ち葉を掃いた場所、朽木を置いてある場所はクワガタも多く、冬はオオスズメバチの隠れ家にもなるとか。いろいろ試行錯誤の工夫があるようです。

20 年前の自然を残そうとした市民の努力に感動しました(瀬田政江)。

活動のお知らせ

運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

8月運営委員会： 8月5日(金) 18:30～20:30

9月運営委員会： 9月2日(金) 18:30～20:30

いずれもエコポリスセンター環境学習室です。

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：9月15日(木) 18:00～ 場所：エコポリスセンター

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)

毎月第4土曜日が定例の活動日です。この日は、赤塚や徳丸が原公園で私たちが作った自然の場所を中心に自然観察やゴミ拾い、課題が合った場所について別途必要な修理等を行っています。原則として雨天も実施します。

7月の活動 城址の観察会とゴミ拾い

鳥をつくったトンボ池、再生をめざす湧水池、バッタ広場で元気真っ最中の動植物を観察します。ゴミも拾って。

日時：7月23日(土) 10:00～12:00

集合場所：美術館前トンボ池

持ち物：観察にはルーペや図鑑、ゴミ拾いには軍手、ゴミ袋、水分補給用の水筒も。

8月の活動 バッタ広場の調査

茂ってきた樹木をいよいよ切ること。一定の区間の印を付け、全部切って、木の種類と直径と高さを測定、木についていた昆虫を全部拾い出します(昆虫は釣巻さんが持ち帰り同定)。

日時：8月27日(土) 10:00～12:00

集合場所：バッタ広場(場所が分からない人は、美術館前トンボ池に定刻に集合)

持ち物：観察にはルーペや図鑑、ノコギリ、軍手

生き物のすめる環境整備の活動(平日の水曜日)

浄蓮寺下のピオトープのザリガニ対策、赤塚トンボ池の水際復活、バッタ広場の遷移ストップ作戦など、年月が経った池や草原ピオトープ維持作業を体力と天候と相談しながらやります。

日時：毎週水曜日 10:00～12:00

集合場所：美術館前トンボ池

その他：小雨のときは実施します。夏休みもあるかもしれませんので、8月のご連絡を。

連絡先：坂本 3968-9760(090-4618-1295)